蘇芳集

すぐそこで

青山　丈

川と土手一つに曲る彼岸かな

七三に髪分けて来て花曇

ブランコだけ行つたり来たりさせてみる

折角の枝垂桜を一とまはり

すぐそこで明るいうちに桜散る

桜蘂降るもう踏んだ気もするが

藤を見に畑の中も通りけり

行く当て

小川美知子

蝶追つて曙杉の裏へ回る

見つづけて真白き蝶を見失ふ

紅椿仄暗く咲き残りたる

雨降れば雨の桜を見てをりぬ

巡回の青い制服花の雨

母の忌の雨降り止まぬ桜かな

行く当てのあるやうな顔春深し

封書二三を

木内憲子

蠟涙に蠟足す水の温むころ

芽柳にふれてつめたき日向かな

信号のいつせいに赤うららけし

ざつと読む新聞亀の鳴く日かな

手秤に封書二三を夕永し

三月の風清潔に吾を過ぐ

新聞に死亡欄あり桜満つ

満開　小島みつ如

彼岸晴家族総出の墓洗ふ
菜の花の丈のよろしき供花となし
「しあわせね」と問はれ頷く木瓜の花
草木瓜の根の這ふ力樹下を朱に
朝桜今日もにこにこ介護所へ
寺々の桜満開送迎車
満開のさくら径ゆく浄土とも

短命　清水裕子

彩のある夢に目覚むる万愚節
本箱の本整然と花の冷
落花絶え間なく箒目整はず
桜散る川の向かうも桜ちる
花吹雪記憶の中に母ゐます
段葛歩めば風の落花身に
短命の遊女の墓とや竹の秋

雛の夜　下平直子

ことことと夫の水仕や雛の夜
一病のあれど息災耕せり
日輪を容れてふくらむ春の水
滔滔と青空流す春の川
春の夢覚えなけれど目の濡れて
窓開けて花菜明かりの診療所
一歩一歩旅の終りの青を踏む

寒い椿　冨田正吉

落椿ゆつくりと雲ゆきにけり
じんじんと寒い椿となつてゐる
椿見てなんだか腹が立つてくる
鏡よりはみ出してゐる椿かな
雪降つて雪の椿となりしかな
手水舎の水つめたくて四月尽
葛飾の橋の端なる花菖蒲

姿見　野路斉子

五月来る窓を開ければ師の母校
窓に立つだけでその蝶驚かす
子供の日小さな犬が人庇ひ
静かなるひと朴の花咲く如く
硝子戸はばらの姿見よく拭かれ
二人来て二人物干すばらの昼
頭上とは泰山木の咲く処

芽吹く　別府優

ぴしぴしと芽吹く真下の往き来かな
春泥の靴あと重く魚買ひに
啓蟄や自動払ひに釣りが出て
雛の日の手もちぶさたか髪を結ひ
花は名のみの花籠に水を足す
いつ時の紙片をつづる春の雪
父の忌の鉢に適ふと苗木植う

木々の照　前田陶代子

物干せばすぐに風きて蝶の来て
三月や木々の照り合ふ水の面
沼尻の僅かな水を蘆の角
深入りて昼のくらさの椿山
しじま深めて早春の椿山
芽柳の風の中なる約ひとつ
雛の夜の揃へて常の箸二膳

春落葉　松原ふみ子

しばらくは朝日を華と春の霜
雲ひとひら春一番の過ぎしあと
啓蟄や玄関に置く車椅子
鳥影の寄ればさざめき春の水
湖は鋼光りに土佐水木
春落葉踏めば月日の自づから
待つ未来あり山茱萸の咲くあたり

緑立つ

峰岸よし子

半仙戯ふさぎの虫を追ひくれし
桃ぐもり指の先までねむたうて
苗売りに苗乾かさぬこと大事
市果てて残りし苗のもたれ合ふ
初蛙草を跳びきし草のいろ
猫やなぎ靄あげてをる堰の水
緑立つ沖群青に晴れわたり

何ンにもなくて

宮尾直美

話すこと何ンにもなくて春炬燵
土佐人は言葉飾らず山椒の芽
菩提寺を指呼に住み古り山桜
初蝶の行つたり来たりそして消ゆ
春愁の鏡見ぬなり拭かぬなり
働けることのしあはせ桜餅
海へ落つ夕日大きく春の鴨

御殿坂

八木下末黒

雨降つて彼岸の入りを鍋ものに
彼岸過ぎ川面に亀の浮いてゐる
四五本の桜をかぞへ御殿坂
花の雨手向けの花を打ちにけり
父の忌や雨の桜を父に告ぐ
あづまやに雨がうがうと花の寺
燈籠に貼りつく雨の桜かな

虚子忌の谷戸

吉田幸敏

蘆の角油膜最も張るあたり
蛙合戦鳥羽僧正の昔より
こんなにも虚子忌の谷戸の紅椿
鬼縛り咲いて音無き水車小屋
吟行につどふ誰もが桜人
もとの木はどれでもよくて花吹雪
飛花をゆくマリンスノーを行くやうに